

影

(一幕)

岡本綺堂

青空文庫

登場人物——重兵衛。太吉。おつや。旅人。巡查。青年甲、乙。

現代。秋の夜。

相模国、石橋山の古戦場に近き杉山の一部。うしろに小高き山を負いて、その裾の低地に藁葺きの炭焼小屋。家内は土間にて、まん中に炉を切り、切株又は石などの腰かけ三脚ほどあり。正面は粗末なる板戸の出入口。下のかたには土竈、バケツ、焚物用の枯枝などあり。その上の棚には膳、碗、皿、小鉢、茶を入れたる罐、土瓶、茶碗などが載せてあり。ほかに簞笠なども掛けてあり。上のかたには寢室用の狭き一間、それに破れ障子を閉めてあり。下のかたには型ばかりの竹窓あり。炭焼の竈は家の外、上のかたの奥にある心にて、家の左右には杉の大樹、薄なども生い茂っている。

月明るく、梟の声。

(棚には小さきランプを置き、炭焼男の重兵衛、四十五六歳、炉の前で焚火をしている。やがて大きい湯沸しにバケツの水を汲み入れて、炉の上の自在にかける。障子の内にて子供の声。)

太吉 おとつさん、お父さん……。

重兵衛 (みかえる。) なんだ、なんだ。

太吉 怖いよう。

重兵衛 なにが怖い。(立^{たちあが}上る。) 夢でも見たのか。

(重兵衛は笑いながら、上^{かみ}のかたの障子をあげると、七歳^{ななつ}の太吉が寢床から這い出して来る。)

重兵衛 はは、どうした、どうした。

太吉 (父に縫^{すが}り付く。) 怖いよう。

重兵衛 なにが怖いのだと云うのに……。おとつさんはここにいるから大丈夫だ。(笑い

ながら叱^{しか}る。) 弱虫め。しつかりしろ。

太吉 でも、なんだか怖いよ。おとつさん。

重兵衛 なにを云やあがるんだ、馬鹿野郎……。 (声がやや暴^あくなる。) そんな弱虫で、

おとつさんと一緒にここにいられるか。あしたはもう家^{うち}へ追いかえして仕舞^{しま}うから、そう思え。いいか。

(太吉はだまっている。)

重兵衛 それだから家にいと云うのに、お父さんと一緒ならさびしくねえと云つて、無理にここへ附いて来たんじゃないやあねえか。お父さんは年中この山の中の一軒家に住んでいるが、唯の一度だつて怖いと思つた事なんぞありやあしねえ。(云いかけて肩をすくめる。)

ああ、夜になったら薄ら寒くなつて来た。さあ、おまえも火のそばへ来て、よく暖まつて寝ろ。怖いんじゃないやあねえ、寒いのだ。よく暖まつて、
 好い心持にぐつすり寝ろ。

(太吉はやはり無言で炉の前に来る。重兵衛は更に枯枝をくべる。梟の声。)
 太吉 (怖ろしそうに耳を傾ける。) お父さん。あれ、あんな声が……。

重兵衛 あれは梟だ。梟が啼くのだ。めずらしくもねえ。(笑う。) おまえは今夜、どうかしているな。

(二人は向い合つて焚火にあたつている。薄く山風の音。小唄の声遠く聞ゆ。)
 惚れて通うに何怖かろう。

(太吉は俄に立上りて、再び父に取継る。)

太吉 怖いよう。おとつさん。

重兵衛 また始めやあがつた。意気地無しめ。いよいよあしたは家へ帰してしまふぞ。

太吉 (恐怖の眼を表へ向けて。) あれ、来たよ、来たよ。

今宵も逢おうと、闇の夜道を唯ひとり。

重兵衛

成ほど、だれか歌いながら来るようだ。聞き慣れねえ声だから、ここらの若え者
じやあるめえ。旅の人でも迷つて来たかな。

先や左程にも思やせぬのに、こちや登りつめ、山を越えて逢いにゆく。

(重兵衛は唄を聴いている。太吉は顫えながら父に獅噛み付いている。やがて重
兵衛は立つて、下のかたの窓から覗く。)

重兵衛

ああ。こつちへ来た、来た。

太吉

怖いよう。

(太吉はもう堪らなくなつて奥へ逃げ込み、一生懸命に障子をがたと閉める。

重兵衛は表をながめている。下のかたより二十五六歳の旅人、旅やつれは見えない
がらも人柄は賤しからず、洋服を着て登山帽をかぶり、足にはゲートルを着け、
リュックサックを背負い、木の枝を杖にして出づ。)

旅人

(重兵衛に声をかける。) 済みませんが、少し休ませて貰えませんか。

重兵衛

はい、はい。どうぞお這入り下さい。

旅人 這入^{はい}つても構^くいませんか。

重兵衛 かまいませんよ。(正面の戸をあける。) さあ、さあ……。

旅人 (内に入る。) とんだお邪魔をします。

重兵衛 焚火も丁^{ちやうど}度燃え付いた所だ。さあ、おあたりなさい。

旅人 ありがとうございます。(リュックサックをおろして、炉の前に腰をかける。)

まだ十月のなかばだと云うのに、山の中は随分寒うござんすね。

重兵衛 (笑う。) 山の中という程でもないが、それでも夜になると、里よりは滅^{めつき}切り冷

えて来るようですよ。あなたは夜道をかけて、今頃^{いま}どうしてこんな所へお出^いでな
すつたのだね。

旅人 箱根を越して甲州へ出る積^つりです。

重兵衛 はあ、甲州へ……。

旅人 行かれるでしょうね。

重兵衛 わたしも行ったことは無いが、行かれる筈ですよ。それじゃあ今夜は箱根泊^どりで
すね。

旅人 さあ、箱根に泊るか、夜通し歩くか、まだはつきりとは決めていないんですが……

…。ここらの山に獣けものが出来ますか。

重兵衛　むかしは狼が出たとか、猪や熊も出たとか云うことですが、今じゃあ何が出るもんですか。唯ただときどきに猿が出て来て、油断をしていると食い物を盗んで行く位のことですよ。

旅人　（安心したように。）そうですね。それじゃあ夜道も安心だ。（窓のかたを見かえる。）今夜は好い月ですね。

重兵衛　旧暦の十三夜ですよ。（思い出したように笑う。）眼の前に薄すすきは沢山生はえていながら、今夜は供えるのを忘れてしまった。

旅人　十三夜ですか。（考える。）先月の十五夜は……ここらも好い月でしたか。

重兵衛　いい月でしたよ。

旅人　（何かの感慨に耽ふけるように。）東京もいい月でした。

重兵衛　あなたは東京でしょうね。

旅人　ええ、まあ、そうです。

重兵衛　今歌って来たのはあなたでしょう。

旅人　聞えましたか。いや、どうも……。　（きまりが悪そうに頭を撫でる。）実はあん

まり寂しいので、聞きかじりの小唄を出たらめに、はははははは。

重兵衛

わたしは田舎者でなんにも判りませんが、あなたは中々いい喉のどのようですね。

旅人

冗談でしょう。人通りのない山の中だから遠慮なしに大きな声を出したので……。東京のまん中じゃあ気恥かしくって歌えませんよ。

重兵衛

（同じく笑いながら。）その東京の人がこちらへ来て、それから甲州へ行く……。どこかのお帰りですか。

旅人

（少し躊躇ちゆうちゆうしながら。）ええ。わたしは旅行好きで、それからそれへと飛び歩いてるんです。

重兵衛

それはお楽しみですね。

旅人

（ひとつき）一月ほど前、丁度ちやうど十五夜の晩から家うちを飛び出して、方々ほうほうをあるいて来ました。

重兵衛

どっちの方をあるいてお出でなすつた。

旅人

初めは東北地方へ出かけて、那須なすの方へ行きました。それから福島の飯坂いひざかへ行って、会津あいづへ行つて……。それから越後へ出て、北国ほくこくの方をまわつて……。東海道を汽車で帰つて来て、今夜は熱海あたみで降りました。

重兵衛 (おどろいたように。) ほう、随分あるきましたね。

旅人 熱海から山道伝いにここまで来たんですが、夜ではあり、道の案内を知らないの
で、今もいう通り、出たらめの小唄を唄鳴りながら、無茶苦茶に歩いて……。

(苦笑いする。) ここは一体なんと云う所ですね。

重兵衛 あなたは湯河原ゆがわらの温泉を御存じでしょう。

旅人 湯河原……。知っています。

重兵衛 その温泉場から遠くない、土肥とひの杉山という所です。頼朝よりともが隠れたという大杉
が先頃まで残っていました。今はもう枯れてしまいました。

旅人 それじゃあ里から遠くないんですね。

重兵衛 山の中と云つても、里は近いのです。わたしの家うちも直ぐ下の村で、女房や娘は百
姓をしていますよ。

旅人 ひとりでここに住んでいるんですか。

重兵衛 ここは炭焼小屋ですから、わたしが住んでいるのです。

旅人 (あたりを見まわして。) ああ、炭焼小屋ですか。

重兵衛 (上かみのかたを指さす。) 竈かまはこの小屋のうしろにあります。

旅人 成程。なるほど（うなずいて。）それにしても、ひとりて寂しくはありませんか。

重兵衛 馴れているから別に寂しいとも思いません。それに村が近いので、家の者うちも時々
にたずねて来ますからね。今夜も子供がひとり泊りに来ています。

旅人 子供さんは幾つです。

重兵衛 年弱としよわの七つですから、まだ本当の子供ですよ。

旅人 子供さんがいるなら、ここに好い物があります。（リュックサックの中から鮎すしの
折詰おりづめを取出す。）これは汽車の中で買ったんですが、ここで蓋ふたを明けることに
しましょう。（折の蓋をあける。）

重兵衛 やあ、それは御馳走ですね。子供はさぞ喜ぶでしょう。（奥に向って呼ぶ。）お
い、太吉。ここへ来い、ここへ来い。お客様が好い物を下さるぞ。早く出て来い。
（障子の内では答えず。重兵衛は立って、障子をあけて覗く。）

重兵衛 これ、何をしているのだ。お客さまが旨うまいものを下さると云うのだ。（笑いなが
ら。）まあ、だまされたと思つて来てみる。

旅人 もう寝てしまったんですか。

重兵衛 なに、起きているのですが……。これ、太吉。なぜ隅の方に小さくなっているの

だ。さあ、出て来い。ええ、出て来ねえか。

太吉 (泣声で。) 忌だよ、忌だよ。怖いよ。

重兵衛 又そんなことを……。この弱虫め。まあ来てみると云うのに……。この野郎、ぐ

ずぐずしていると、襟えりツ首くびをつかんで引摺ひきずり出すぞ。

(重兵衛は太吉の腕をつかんで、無理に引摺ひきずり出して来る。太吉は旅人を一目見るや、更に恐怖の念を増したる如く、身をすくめて土間の隅に小さくなっている。)

重兵衛 さあ、お客様に御挨拶をしねえか。

旅人 (笑いながら。) 今晚は……。

(太吉は答えず、いよいよ身を竦すくめている。)

重兵衛 (舌打ちして。) 仕様のねえ奴だな。まあ、折角の御馳走ですから、番茶でも淹いれましょう。湯ももう沸いたようです。

(重兵衛は太吉を横目に睨みながら、自在じざいの湯沸ゆわかしを取って下しものかたへ行き、棚から土瓶どびんをおろして茶の支度をする。梟ふくろうの声。)

旅人 (これもやや恐怖を感じたように。) あ。あの声はなんですか。

重兵衛 梟ですよ。

旅人 忌いやな声ですわね。

重兵衛 あなた、聞いた事はありませんか。

旅人 下町に住んでいたので、聞いたことがありません。いや、どこかで聞いた事があるかも知れないが、あんな忌いやな声だとは思いませんでした。(梟の声つづけて聞きこゆ。)ああ、又啼ないている……。なんだか人を呼んでいるようですね。

重兵衛 わたし達は年中聞き慣れているので、なんとも思いませんが、たまに聞く人には忌いやな声かも知れませんか。

(重兵衛は盆の上に土瓶どびんと茶碗を乗せて、再び炉の前に来る。)

重兵衛 こんな所ですから穢きたない茶碗で、まあ御勘弁ください。

旅人 色々御厄介になります。(茶をのみながら。)さあ、遠慮なしに喰べて下さい。

(鮓すしの折を差出さしだす。)子供さんは嫌いですか。

重兵衛 嫌いどころか大好きで、飛び付いて喰べるのですよ。(太吉に。)これ見ろ。おまえが大好きな玉子もあるぞ。海苔のり巻まきもあるぞ。早くここへ来て御馳走になれ。おまえは鮓すしは嫌いか。

(太吉は首をのぼしてそつと覗いたが、旅人を見ると又俄にわかに小さくなる。重兵衛は客の手前もあり、わが子の意気地のないのが腹立たしくもあり、声を暴あらくして叱しかり付ける。)

重兵衛 やい、何をぐずぐずしているのだ。ここへ来い、ここへ来い。

太吉 (低い声で。) あい。

重兵衛 あいじゃあねえ。お客様がいるのに行儀の悪い奴だ。早く来い、この野郎……。

(炉のそばにある枯枝を把とつて、太吉に叩き付ける。)

旅人 (あわてて遮さへぎる。) あ、あぶない。怪我けがでもさせると、いけない。

重兵衛 なに、云うことを肯きかない時には、いつでも斯こうして引っぱたくのです。野郎、

まだ来ねえか。(又もや枯枝をふり上げる。)

(太吉も今は引込ひっこんでもいられず、恐る恐る這い出して来て、父のうしろに寄添よりそうと、重兵衛は鮓との折を把とつて、その眼まさきに突き付ける。)

重兵衛 どうだ。旨うまそうだろう。お客さまにお辞儀をして、どれでも好いいのを喰べてみる。

(太吉は父のうしろに隠れたままで答えず。)

旅人 (笑いながら。) 早くおあがんなさい。

(その声を聞くや、太吉は又ふるえ上^{あが}つて、父の背中に獅^し噛^がみ付く。)

重兵衛

今夜に限つて変な奴だな。おまえが喰^くべなければ、お父さんが皆^みんな喰^くべてしま
うぞ。いいか。

(太吉は無言で首^{うなず}肯^くく。重兵衛は鮓^{すし}を一つ取^とつて旨^{うま}そうに食^くい、茶をのむ。旅人
は巻^ま煙^{えん}草^{そう}を出^だして吸^すいはじめ^める。梟^{ふくろう}の聲^{こゑ}。)

重兵衛

わたしばかりが遠慮^{えんりょ}なしに喰^くべていちやあ失^し礼^{れい}だ。あなたもどうぞ上^{あが}つて下^{くだ}さい。
いえ、わたしは煙^{えん}草^{そう}の方が好^いい。あなたもどうです、煙^{えん}草^{そう}は……。(巻^ま煙^{えん}草^{そう}を出^だ

旅人

す。)

重兵衛

やあ、これは色々御馳走^{ごちそう}さまで……。じゃあ、一本頂戴^{ていだい}します。(煙^{えん}草^{そう}を貰^{もら}つて
吸^すいながら、太吉をみかえる。)こいつはわたしの末^{すえ}ツ子^こで、始終^{しじう}ここへ遊^{あそ}びに
来^きたり、泊^{とど}りに来^きたりして、さびしいのには慣^なれてゐるのに、今夜に限^{かぎ}つてさび
しいの、怖いのと云^いうのです。ここはこの通りの一軒^{いっけん}家^かですから、山道^{さんだう}に迷^まつた
人^{ひと}なんぞが時々にたずねて来^きることもありますが、こいつは馬鹿^{ばか}に人^{ひと}なつツこい
奴^{やつ}で、識^しらない人^{ひと}でも直^すぐにお友^{とも}達^{だつ}のようになつて、おじさんおじさんと云^いつて
いるのですが、どう云^いうわけだか今夜のあなたに限^{かぎ}つて、お辞儀^{しげい}もしないし、口

も利かないで、私のうしろに小さくなっているばかりで……。まったく変な奴ですよ。

旅人

（笑う。）わたしがよつほど嫌われたと見える……。いや、わたしはこの子ばかりじゃあない、誰にでも嫌われるような人間に出来ているんです。

重兵衛

それこそ御冗談でしょう。御馳走になったからお世辞をいうのじゃあねえが、あなたのような人を嫌う者はありますまい。はははははは。

旅人

（力強く。）いえ、嫌われますよ。取分けて女には嫌われたり、だまされたり……。まったく哀れな人間です。

重兵衛

（笑いながら。）あなたは裏を云っているのじゃありませんか。

旅人

裏も表もない。ほんとうのことですよ。現に今度の旅行でも、ゆく先々で忌がられたり、嫌われたり、どこでも好い顔をされませんでした。

重兵衛

なぜでしょう。

旅人

わたしがそういう人間に出来ているんでしょう。

重兵衛

そうですかねえ。

（話に継穂がなく、二人は黙って烟草を吸っている。下のかたよりおつや、二十

四五歳、熱海あたりの芸妓げいことおぼしき風俗にて出づ。おつやは頗る威勢すこぶのいい女、少し酔っている。）

おつや （窓の外より呼ぶ。） おじさん。黒い小父おじさん。

重兵衛 誰だ。（覗いて。） おお、おつやか。今頃どうして来た。

おつや （少し躊躇ちゆうちよしながら。） お客様じゃあない……。

重兵衛 むむ、お客様だが……。まあ、遠慮なしに這入れよ。

旅人 どうぞお構いなく……。

おつや じゃあ、御免なさい。

（おつやは正面の戸をあけて内に入り、炉のまえに来て旅人に会釈する。旅人も無言で会釈する。）

おつや （馴なれ々しく。） 今晩はなかなか冷えますね。

旅人 急に寒くなつたようです。

重兵衛 （おつやをじろじろ見て。） 今頃ここへどうして来たんだよ。

おつや （旅人を見返りながら。） お客様の前で云つても好いの。

重兵衛 悪い事をしたのでなけりやあ、誰の前でも遠慮はねえ筈だ。まさかに警察から追

つ掛けられている訳でもあるめえ。

（旅人は少しく顔の色を動かしたが、やはり冷静に聴いている。）

おつや 仕舞しまいにやあ追つ掛けられるような事になるかも知れないが……。 （笑う。） 実は

……あたし、主人と衝突してね。

重兵衛 （顔をしかめながら笑う。） また飛び出したのか。困った阿婆あば摺ずれ女めだな。今度

でもう三度目じやあねえか。おめえの主人は熱海でも評判の好い家うちだと云うのに、

どうしてそう喧嘩けんかをするのかな。

おつや どうしてと云つて……。 つまりは性しょうが合わないんでしようね。十月に這はい入いつて、

土地ちも一ひとしきり 繁はん 昌しょう する時節じせつだから、その稼くわぎ時じに五六日も家うちをあけて、

些ちつと主人を困こらせて遣やりたいのさ。黒いおじさん、だしぬけで済すみませんが、

五六日の間ここへ隠かくまって呉くれない……。

重兵衛 隠れるなら小田原へ行くがいいじやあねえか。自分の家がある筈はずだ。

おつや 自分の家うちじやあ直すぐに追手おってがかかるのは知しれている。と云つて、懐ふところは秋風あきかぜだ

から、東京や横浜までのして行って、ぶらぶら遊あそんでいるほどの元氣げんきも無し、こ

こなら誰も氣きが注つく氣きづかいも無いから、まあ五六日かく隠かくまって貰もらって、好いい時じ分ぶん

に天から降つたようにのつそりと帰る積り……。ねえ、後生だから置いて頂戴よ。

重兵衛 飛んでもねえ主人泣かせだな。稼ぎ時に稼がなけりやあ、主人が困るばかりでな

く、第一自分の損にもなるじやあねえか。そのくらいの理屈が判らねえのか。

おつや あら、忌だ。損得なんぞを考えて、主人と喧嘩が出来るかかって云うんだ。ははは

ははは。(笑いながら旅人に。)ねえ、あなた。そうでしょう。

旅人 (同じく笑いながら。)そうかも知れませんか。

おつや (重兵衛に。)そら御覧なさいな。こちらだつて、あたしに同情して下さいな。

黒いおじさんだつて、女ひとりが斯うして駆け込んで来た以上、いざ縄打つて代

官所へなんて、野暮なことを云やあしないでしょう。

重兵衛 どうでおれは野暮な人間だが……。 (苦笑いして。)まったくお前は女ひとり：

……。いくら月夜でも、これから夜道を追い返すわけにも行くめえ。今夜だけはま

あ泊めて遣るから、あしたになつたら何処へでも勝手に出て行つてくれ。長く泊

めて置くことは出来ねえぞ。いいか。

おつや はい、はい。あしたになれば又あしたの風が吹きます。行き暮らしたる旅の修行

者、一夜の宿をお貸し下されば結構でございます。まあ、まあ、これで安心した。あはははははは。 (云いながら太吉に眼をつける。) あら、太アちゃん、そこにいたの。あんまりおとなしいので、些つとも気が注かなかつた。さあ、おぼさんのところへお出でよ。

(おつやに招かれて、太吉はその傍へ寄つて行くが、やはり気味悪そうに旅人の顔色をうかがっている。)

おつや 太アちゃん、お前どうしたの。木から落つこちた猿さんのように、今夜は忌にぼんやりだね。もう眠くなつたのかい。

重兵衛 さつき寝かし付けたのだが、何か魘されたように怖い怖いと云つて、又ここへ這い出して来たのだ。

おつや あら、なにが怖いのか。太アちゃんは不断から強い強いと自慢して、将来は拳闘家になると威張っているんじゃないか。ここにはこの通り、おとっさんもいるし、あたしも居るし、このお客様もおいでなさるし……。狐が来たつて、狸が来たつて、なにが来たつて、びくとする事があるもんかね。

(おつやが「このお客様」と云つた時、太吉はまた悸えておつやに獅噛み付く。

おつやも気がついて、旅人をみかえる。）

おつや おかしいね、この子は……。 （笑う。）こちらが知らない方だもんだから、お前は人みしりをするんだね。こちらは立派な紳士さんで、なんにも怖いことは無いんだよ。

旅人 わたしはさつきから其の子に嫌われているんですよ。

重兵衛 こうして鮓を下すつたりなんかするのに、そいつは手も出さなければ、お辞儀もしねえ。仕様のねえ馬鹿野郎だ。

おつや ほんとうに仕様のないお馬鹿さんだね。 （鮓を見て。）じゃあ、これはこちらが下すつたの。太アちゃんのだりに、あたしが一つ御馳走になっても好いかしら。

旅人 どうで旨くはありますまいが、さあ、さあ、遠慮なしに食べて下さい。

おつや 行儀の悪い千松でございます。どうぞ御勘弁を……。

（おつやは笑いながら鮓を一つ摘んで食う。重兵衛もまた食う。旅人は烟草を吸いながら眺めている。）

おつや おじさん。後生だからお湯を一杯……。

重兵衛 そうか、そうか。はは、忘れていた。 （膳棚へ茶碗を取りにゆく。）

旅人 (思い出したように。) いや、わたしも忘れていた。お茶よりもここに好い飲み

物がありますよ。(リュックサックより大おおびん罎びんの酒とりだを取出す。) これはどうです。

おつや あら、お酒……。まあ、素敵すてきだわ。あなたは色々の物を仕込んでお出いでなすつたのね。

旅人 どこで野宿のじやくをするかも知れないと思つて、途中で買つて来たんですよ。さあ、飲

んで下さい。

おつや あたしがお酌しやくをしますから、あなたもお飲みなさいよ。ちよいと、黒いおじさん。

重兵衛 一々黒いおじさんと云うなよ。

おつや だって、おじさんは炭を焼く人じやあないの。

重兵衛 なるほど炭焼すすきにやあ相違ごていねいねえが、御町ごていねい噂わさに黒と断ことわるにやあ及およばねえ。口の悪い

奴だ。

おつや 黒がそんなに悪いかしら。天下を望む大伴おおともの黒主くろぬしと来りやあ、黒だつて役が

いいわ。まあ、そんなことより、これ、これ……。 (罎びんをみせる。) 又こんなものを頂いたのよ。

重兵衛 ほう、酒か。(顔をくずして。) いやいよ御馳走ごちそうだな。

おつや さあ、さあ、これから宴会を開きます。幹事諸君もお席へお着きください。はははははは。

(おつやは膳棚の下へ行つて罎の口を抜き、小さい盆に乗せて来る。太吉はうろうろして、そのあとへ附いてゆく。)

おつや うるさいねえ、この子は……。糸の切れた奴やつこだこ 凧かのように、なぜそうからみ付くんだよ。(旅人に。) まあ、あなたから……。こんながらツぼち八のサアビスじゃあお気に入りますまいけれど……。

旅人 いや、どうも……。 (自分の茶碗に受けて少し飲む。)

おつや さあ、おじさん。

重兵衛 (旅人に会釈する。) じゃあ頂きます。(おつやに注つがせて飲む。) ああ、結構な酒だ。おまえも御馳走になれよ。

旅人 わたしがお酌をしましょう。

おつや あら、あなたが……。どうも済みません。(旅人の酌で飲む。) ねえ、黒……。おっと、白いおじさん。こうなると、あたし今夜は馬鹿に愉快になっちまったよ。主人と衝突して、さつきから無暗むやみにむしゃくしゃして……。そら、何なんとか云う

でしよう。ああ、憂鬱、憂鬱……。その憂鬱になつていたのが、ここで斯うして一杯飲んだら、胸がすうとして、急に朗かになつて……。ああ、好い心持だ。トテモ愉快だわ。

（おつやは再び重兵衛に酌をする。重兵衛も好い心持。そうに飲む。旅人は無言でおつやに酌をする。）

おつや まだ飲ませて下さるの。はい、はい、恐れ入りました。（又飲む。）ねえ、あな

た。まだ御挨拶も致しませんでした。あたくしはこのおじさんの遠縁にあたる者で、生れは相州小田原在、餓鬼の折から手癖が悪く……。じゃあ大変だが、まあ些つとばかりペンペンを仕込まれたのが因果で、先ず小田原を振出しに、東海道を股にかけてという程でもございせんが、大磯箱根や湯河原を流れ渡つて、唯今では熱海の松の家に巢を食つて居ります。俗名はおつや、芸名は金八、あだ名はがらツ八又はがら金……。若しインチキだと思召すなら、念のために役場へ行つて、戸籍の謄本をお取りください。あはははははは。

旅人 （羨むように。）あなたは全く朗かですね。

おつや （いよいよ調子が崩れて来る。）ええ、ええ、大いに朗かよ。この頃の流行り言

葉で、明朗めいろうとか云うんですよ。それでも月に村雲むらくも、朗かな人間にも時々虫

の居所の悪いことがあつて、主人とも衝突しぼしばいたします。電車だつて自動車だつて

屢々衝突する世の中に、芸妓げいこが主人と衝突するのも不思議はないでしょう。ねえ、あんた……。あたしはあんたの名を知らないから、まあアンちゃんにして置

くわ。ねえ、アンちゃん、そうでしょう。君もつ以て如何いかんとなす。あはははははは。

重兵衛
（苦々にがにがしそうに。）どうも騒々しいな。好い加減いかにに喋しゃべつて置け。一杯や二杯の

酒で調子の狂うお前じやあねえが、今夜はよっぽど下地したじがあるな。

おつや
おじさんの千里眼せんりがんは偉い。実は熱海の駅で汽車を待っているあいだに、休み茶

屋へ飛び込んで、ビール一本と何だかの饅頭びんづめ詰一本、まさかに喇叭らっぱは遣やらないけ

れども、息もつかずにぐつと聞こし召して、その勢いで猛烈に、かかる山路やまじへ突

貫つかんして来たのよ。そのくらいのアルコールは途中で醒めてしまった筈だが、こ

の狭いところへ這入はいつて、焚火にかつかとあぶられたら、又その酔よが一度に発し

て来て、いよいよ朗ほがらかになつて来たのよ。なんだか知らないが、今夜はトテモ愉

快で嬉しくつてならない。さあ、アンちゃん。もう一つお酌をして下さいよ。

（旅人は無言で酌をすれば、おつやは続けて飲む。）

重兵衛 まあ、お客さん。失礼は勘弁して遣つてください。こいつは自分でもいう通り、

がら金のがらツ八で……。それだから行く先々で主人と喧嘩の絶え間がないので
すよ。商売が商売だから、丸ツきり飲まねえわけにも行くめえが、女のくせに大
酒をのむ、掴み合いの喧嘩をする……。

おつや およしなさいよ、他人様の前でそんな色消しなお噂は……。そういうのを流言
蜚語とか云つて、この頃は警察の取締りが非常にやかましいんですよ。さあ、

口塞げに、白いおじさんにももう一杯……。 (重兵衛に酌をする。) あたし達
ばかり勝手なことを云つて飲んでいちやあ、それこそ失礼だわ。 (旅人に。) さ
あ、あんたも召上れ。何を陰気らしく考えているのよ。

旅人 いや、わたしは飲まないんです。

おつや 飲まないのに、どうしてこんな大罌を買込んだの。

旅人 水の代りに買ったんです。

おつや 水の代りなら、サイダーでも買えばいいじゃありませんか。嘘、嘘……。あんた
屹と飲むのよ。さあ、がら金に恥を掻かせないで、愉快にサアビスをさせて頂戴
よ。

旅人 いや、せいぜいが一杯ぐらいで、その上はまったく飲めないんです。わたしは野暮な人間で……。

おつや

嘘つき……。 (睨む。) あんたが野暮天か道楽者か、その見分けが付かないように、憚りながら芸妓の鑑札かんさつを持っていられるかって云うんだ。モダンの富士詣もとうでのような風をしても、あんたがどんな人間か、眼力がんりきひからず松王丸まつおうまるがちゃんと睨んでいるわ。ねえ、アンちゃん。あんたは随分芸妓なんぞに可愛がられたことがあるでしょう。

旅人

ひやや (冷かに。) ありませんね。

おつや

それじゃあカフエー……。

旅人

ひやや (やはり冷かに。) いいえ。

おつや

芸妓にも女給さんにも御縁がないの。

旅人

ありません。(重兵衛をさして。) 今もこちらに話したんですが、わたしは我ながら哀れな男ですよ。

おつや

あんたの御商売は……。

旅人

東京でつまらない商いあきなをしていましたが、それももう止めてやしまつて……。 (我

を嘲あざけるように。(まあ、与よた太者かルンペンだと思ってください。

おつや

ルンペンはよかったね。まあ、なんとも猫をかぶっていらつしやい。(笑う。)
 あんたは野暮な人間で、哀れな男で、与太者で、ルンペンで、まことにお羨うらやまし
 ゆうございます。そうして、あんたはどつちへいらつしやるの。そんな拵こしらえをし
 て山登りでもなさるの。

(旅人は無言で焚火をみつめている。)

重兵衛

これから箱根へ出て、山越しに甲州の方へ行きなさるのだとよ。

おつや

あら……。仰ぎ山ようらしく。(まあ、冒険だわねえ。それにしても、これから

夜通しで山越しは、どうかと思うわ。木賃ぼくちんホテル御一泊のつもりで、今夜はこ
 こへお泊りなさいよ。

重兵衛

むむ。おれもそう思っていたのだ。何も怖い物は出やあしめえと思うけれど、な
 にしろ山の中の夜道は不用心で、足を一つ踏みはずしても大変だ。(旅人に。)

この通りの狭い小屋で、寝る所も無し、貸してあげる夜具もありませんが、焚火
 のそばで居眠りでもして、夜が明けてからお立ちなすったら何どうですね。

旅人

さあ。(かんがえている。)

おつや あんた。素直にオーケーとお云いなさいよ。邪魔なおじさん達を先へ寝かして仕

舞まつて、あんたとあたしと差さしむか向いで、ゆつくり夜明しをしましょうよ。なにしろ舞台がこんな所で、ふくろの鳴き声や狸たぬき囃ばやし子の鳴なり物ものじゃあ、しんみりしたお芝居にやあなりませんけれど、漫才の掛かけ合あいだと思えばいいでしょう。

（旅人は無言で考えている。）

おつや （摺すり寄る。）あたしがだんだん陽気になるのに、あんたはだんだん陰気になつ

ちやあ、お附つきあ合あいが出来ないじゃありませんか。ねえ、あんた。袖そでふり合あうも他た生しょうの縁えんとかいうから、そんなにあたしを嫌わなくつても好いいでしよう。今夜はここで仲好よくお話をしましょうよ。（笑いながら。）あんたはこんな唄を御存じ……。あの時が無かつたら、あなたはあたしの物じゃない——。（旅人の背中を軽く打つ。）はははははは。

重兵衛 よく笑う女だな。お前ひとりで喋しゃべっているの、騒々しくてならねえ。いくら山

の中の一軒家でも、ちつとは遠慮するものだ。おれはお客様しずかと静しずかに話わをしてから、おまえのようながらツ八は、太吉と一緒に奥へ行つて、早く寝てしまえよ。あら、あたしを先へ寝かそうと云うの。この夜の長いのに、独り者が今から寝ら

れますかよ。(旅人に。) あんた、何時……。

旅人 (腕時計をみる。) 九時二十分過ぎです。

おつや 九時二十分……。あたし達にはまだ宵の口だわ。それにしても太アちゃんは眠い

だろうね。(うしろを見かえる。) あら、おかしな子だねえ。さつきから何だか

邪魔だと思つたら、あたしの帯にしつかりと獅噛み付いて、これが本当の腰巾

着ちやくというんだね。(鮓すしを指さして。) お前、これを食べないのかい。さあ、お

たべよ。

(おつやは海苔巻のりまきを一つ取つて遣る。太吉は旅人の顔をぬすみ視ながら頭かしらを振る

。)

おつや 忌いやかい。たべないのかい。(これも旅人をみかえる。) この子はやつぱり人みし

りをしているんだねえ。じゃあ、もうお寝な。

重兵衛 そんな奴はあっちへ連れて行つて、寝かしてくれ。

おつや (太吉に。) さあ、お客さまにお休みなさいをしておいでよ。

(おつやは太吉の手を取つて、旅人の前へ引出ひきだそうとすれば、太吉は顫ふるえておつ

やに縋すがりつく。)

太吉 怖いよう。

おつや なにが怖いんだよ。意気地無しだねえ。

重兵衛 (客の手前、気の毒になつて。) ええ、もう好いから早く連れて行け、連れて行け。

おつや さあ、お出で、お出で……。

(おつやは太吉を引立てて、上のかたの障子の中に入る。山風の音。)

旅人 (ひとり言のように。) 風が出て来た。

重兵衛 おお、窓から風が這入る……。道理で、さつきから薄ら寒いと思った。

(重兵衛は立つて、下のかたの窓を閉めようとする時、一としきり強い山風の音。ランプの火が消える。)

重兵衛 (窓をしめながら。) ああ、いけねえ。灯を消されてしまった。

おつや (障子の中にて。) あら、ランプが消えたの。

(土間は暗く、焚火の光もやや薄くなる。山風の音。その薄暗い中で、おつやは障子をあけて出かかりしが、俄にぞつとしたように、框に腰をおろしたまま暫く無言。重兵衛は再びランプを点せば、土間は明るくなる。)

重兵衛

（炉の前に戻る。）ここらの癖で、ときどきに強い山風が吹き出して来るのですが、又すぐに止みますよ。（炉に枝をくべる。）併し風が出ると寒くなります。馴れない方はかぜを引かないように気をつけて下さい。

旅人

（肩をすくめる。）まったく寒くなりましたね。

重兵衛

（酒を把る。）どうです、寒さ凌ぎに……。

旅人

いや、わたしは……。 （頭をふる。）あなた、みんな飲んでください。

重兵衛

そうですか。お客様をそつち退けにして、こつちばかりが勝手に飲んだり食ったり……。 はは、どうも済みません。（手酌で飲む。）

（このあいだに、おつやは何か思索し、そつと正面の出入口のかたへ行く。）

おつや

（小声で。）おじさん。

重兵衛

なんだ。

おつや

（入口の戸をあけながら。）ちよいと……。

（重兵衛をよび出して、おつやは逃げるように小屋の外へ出る。重兵衛も出て、下のかたへ行く。舞台は半廻しになりて、小屋の外。月のひかりに照されたおつやの顔、今までとは別人のように蒼ざめている。）

重兵衛 わざわざ表へ呼び出して、なんの用だ。

(おつやは内を指さして囁けば、重兵衛は笑い出す。)

重兵衛 はは、ばかを云え。

おつや (小声に力を籠めて。) でも、あの人はどうも可怪いわ。太アちゃんが無暗にあ

の人を怖がるのは、なぜだろうと思っていたんだが、あたしも今、急に怖くなつたわ。

重兵衛 なぜだ。

おつや (異常の恐怖に襲われたように。) あのランプが風で消えて……。家のなかが急

に薄暗くなつたでしょう。

重兵衛 むむ。

おつや その時にあたしは障子をあけて出ようとする、焚火の前にいるあの人の影が：

…。トテモ凄いで、ぞつとしたのよ。

重兵衛 影が……。 (首をかしげる。) 影が薄いというのか。

おつや 影が薄いんじゃない、凄いのよ。太アちゃんの怖がるのも無理はない。あの、

確に唯の人じゃあないわ。

重兵衛　でも、まさかに化物じやあるめえ。こころで狐や狸が化けたという話は聞かねえからな。はははははは。

おつや　叱しつ、叱しつ。(制して。)なにしろ気味が悪いから、早く追い出して頂戴よ。

重兵衛　おまえも泊れと云つたじやあねえか。

おつや　(あわてて。)取消し、取消し……。そんな事はもう断然取消しよ。あんな人と一緒に泊るのは真ま平びらだわ。あたしも商売で、今まで色々の人にも出逢つたけれど、あんな凄い人を唯ただの一度も見たことがない。まさかに化物でもないだろうけれど、どうしても唯ただの人間じやあないわ。

重兵衛　(まだ疑うように。)そんな人には見えねえが……。凄い凄いと云つて、一体どんなに凄いなんだよ。

おつや　それがさ。どうと云つて、口じやあ話が出来ないけれど……。なにしろトテモ凄いのよ。さすがのから金も総身に水を浴びせられたように、ぞつとしたわ。太たアちゃんだつて、怖い怖いと云つて、蒲ふとん団をかぶつて顫ふるえているのよ。

重兵衛　子供は兎とも角かくも、お前までが顫ふるえ声になつて……。 (又かんがえる。) あんなおとなしやかな人がどうして凄いのか、おれにやあさつぱり呑み込めねえ。

おつや おじさんは無神経だから、なんにも感じないのよ。じれったいねえ。

重兵衛 そう騒ぐな。まあ、内へ這入はいつて様子を見届けよう。

おつや じゃあ、おじさんだけお這入はいんなさいよ。あたしはここにいるから……。

重兵衛 ここに立っていられるものか。まあ、這入はいれよ。(手を把とる。)

おつや (身ぶるいして。) 忌いやよ、忌いやよ。どうしてあんな人のそばへ行かれるもんか。夜

が明けけるまでここに立っているわ。

重兵衛 こんな所にいると、かぜを引くよ。

おつや (泣なき声こゑになつて。) かぜを引いても、死んでも、かまわないと云うのに……。

(重兵衛を突き飛ばす。)

重兵衛 (呆れたように。) まるで氣違きちげえのようだな。じゃあ、まあ、勝手にしろ。

(重兵衛はそのまま内へ引込ひっこむと、舞台は元に戻る。おつやは抜き足をして窓の下にゆき、閉めたる戸の外から、内の会話をぬすみ聴くように耳をすましている。山風やまかぜの音。旅人は炉のまえを動かず、何かじつと考えていたるが、重兵衛の入きたり来りしを知りて顔をあげる。)

旅人 風はまだ吹いているようですね。

重兵衛 まだ吹いていますよ。(炉のまえに腰をかける。)

旅人 おつやさんとか云う人はどうしました。

重兵衛 おつやは……。 (すこし云い淀よどんで。) そこらをうろうろしているようです。

旅人 月を見ているんですか。

重兵衛 そうかも知れません。あいつも気まぐれ者ですからね。

旅人 (重兵衛の顔をみつめる。) 里へ下つたんじゃありませんか。

重兵衛 いいえ、そんな事はありません。直すぐに帰かえつて来ますよ。(云いながら旅人に眼をつける。)

旅人 そうですか。(考える。) あなたもおつやさんもここへ泊れと云つて下すつたが、ほんとうに泊めてくれますか。

重兵衛 (曖昧あいまいに。) ええ。

旅人 だんだんに夜は更ふける、風は寒くなる。これから山越しをするのも難儀ですから、いつそ今夜は御厄介ごやくかいになリましようか。

重兵衛 (やはり曖昧あいまいに。) そうですか。

(おつやはそれを洩もれ聞いて俄にわかに決心し、正面の入口へまわつて、戸を少し明け

ながら内を窺っている。）

旅人 （遠慮勝がちに。）泊めて貰えませんか。御迷惑ですか。

重兵衛 迷惑というわけでも無いのですが……。

おつや （思い切つて、戸をあけて入る。）おじさん。あたしもさつきお泊んなさいと云つたけれど、いけないわ。

旅人 いけませんか。

おつや （努めて勇気を振り起して。）いけませんわ。よく考えてみると、警察がやかましいんですよ。

旅人 （眼をかがやかして。）警察が……。

おつや ええ。宿屋でもない家で、知らない人をうつかり泊めると、警察が非常にやかましいんです。ねえ、おじさん。（眼で知らせる。）そうだわねえ。

重兵衛 （曖昧あいまいに。）むむ。

おつや それですから、折角せつかくですがお断りことわりますよ。

（おつやの態度が一変したのに、旅人もやや意外らしく、だまって何か考えている。障子の内にて太吉の声。）

太吉 怖いよ。怖いよう。

おつや (ぞつとしたように。) あれ、太アちゃんが又うなされている……。どうしたんだろうねえ。

(おつやは重兵衛に向つて、早く旅人を追い出せと眼で催促する。重兵衛はまだ気の毒そうに躊躇ちゆうちよしている。それを覚さとつたように、旅人は炉の前を離れる。)
いや、判りました。警察がやかましいと云うのでは仕方ありません。これから直すぐに出かけましょう。

重兵衛 (いよいよ気の毒そうに。) お出かけですか。

おつや (追い出すように。) 箱根には宿屋が幾軒もありますから、夜の更ふけないうちに早くおいでなさるが好ようござんすよ。

旅人 (さびしく笑う。) 宿屋へも泊らずに、夜通し歩くことにしましょう。(リュックサックを背負みじたくいて身支度する。) いや、どうもお邪魔をしました。

重兵衛 わたし達こそ御馳走になりました。じゃあ、よく気をつけてお出いでなさい。

おつや 左様さようなら。

旅人 どなたもお休みなさい。

（旅人は小屋を出て、上のかたの奥へ去る。重兵衛も送り出して見送る。梟の声）

おつや （小声で。） おじさん……。もう行ってしまったの。

重兵衛

むむ。（炉の前へ引返して来る。） おまえは無暗に追い出したが、おれは何だか気の毒でならねえ。

おつや

冗談じゃあない。あんな人に、いつまでも居据わっていられて堪るもんか。（土瓶の茶をついで飲む。） ああ、忌だ、忌だ。ほんとうに寿命を縮めてしまった。

太吉

（そつと障子をあげる。） 怖い人、行つちまったかい。
おつや あら、また起きて来たの。もう大丈夫だから、こつちへおいでよ。

（太吉は土間へ出て来る。重兵衛は無言で考えている。）

おつや

真逆これに毒が這入っているわけでもあるまい。もう誰もいないから、安心して
おたべよ。

（おつやは海苔巻の鮓を取ってやれば、太吉は平気で食う。）

おつや

太アちゃん。お前どうして、あんなに怖がったの。あの人がなぜ怖いもの。
太吉 怖いよ。

おつや どうして怖かったんだよ。

太吉 怖かったよ。

重兵衛 (おつやに。) そういうお前は どうして怖かったのだ。

おつや さあ、なんと云つていいか。あたしにもはつきりとは云えないけれど……。ねえ。

太アちゃん。怖かったねえ。

太吉 むむ。怖かったよ。

重兵衛 (腹立たしそうに。) どつちも夢を見ているようで、何がなんだか云うことが判らねえ。泊めて遣つてもいいものを、怖い怖いと無理に追い出してしまつて、あの人も今頃は山道で困つていなさるだろう。気の毒を通り越して、悪いことをしたような気がしてならねえ。

おつや 悪いことか悪いことか知らないけれど、あんな気味の悪い人はジャンジャン追つ払ってしまった方が無事だわ。

重兵衛 不人情なことを云うなよ。

(重兵衛は気が済まないような顔をして、炉に枝をくべている。おつやは太吉に茶を飲ませている。梟ふくろうの聲。下しものかたより村の青年団員二人、詰襟つめえりの洋服まきに巻

ゲートルの姿にて、灯ひを入れない 提ちようちん灯ひを持ち出て出づ。い

青年甲 今晚は……。

おつや あら、又だれか来たよ。

重兵衛 (立つて戸をあける。) おお、青年団の人達か。まあ、こつちへ這はい入りなさい。

(青年団二人は内に入る。)

おつや いらつしやい。皆さんはどうして今頃……。

青年甲 実は駐在所から頼まれてね。

青年乙 こつちの方へ搜索に来たんだ。

重兵衛 だれか家出でもしたのかね。

青年甲 人殺しの犯人が今夜この山へ入り込んだと云うのだ。

重兵衛 (おどろいて。) 人殺しか。そりやあ大変だ。

おつや あ、ちよいと……。 (進み出る。) 名前は知らないけれども、その人は洋服を着

た二十五六の、色の蒼白いような、ちよいと様子の好いい人じゃあないの。

青年甲 そう、そう。なんでもそんな男だそうだ。

重兵衛 一体どこで人殺しをしたのだ。

青年甲 その男は東京の日本橋で稲川という酒屋の息子だが、先月の十七日、旧暦の十五夜の晩に、なじみのカフェーの女給を向むこう嶋しまへ連れ出して、ピストルで撃ち殺したんだ。

重兵衛 カフェーの女給を……。ピストルで殺した……。

おつや まあ呆れたわねえ。なんで女給を殺したんだらう。いずれ色恋のいきさつでしようね。

青年乙 まあ、そうだろうな。男は自分の店から千円ほどの金を持ち出して、女を殺すと直すぐに姿を変えて、どこへか逃亡してしまったので、東京の警察から逮捕の依頼が来ていたんだ。

青年甲 それが一ひと月つきほども立ってから、その犯人がここらへ立たち廻まわったらしい形跡があるので、警察の方でも注意していると、それによく似た若い男が今夜この山へは入ったのを見た者があると云うんで、駐在所の吉村さんが直すぐに出かけたから、わたし達も手分けをして捜索に来たんだが、そんな男はここへ来なかつたね。

重兵衛 え。（返事に躡ちゆう躡うちよする。）

青年乙 今の話の様子じゃあ、つうちゃんはそれらしい男を見たんだらう。

おつや ええ、見ましたよ。山づたいに箱根へまわると云って、たった今ここを出て行つたんだから、まだ遠くは行かないでしょうよ。

青年甲 重さん、ほんとうかい。

重兵衛 (仕方なしに。) むむ、そうだ。

おつや (亢奮して。) パチンコなんぞを振りまわして、むやみに女を撃ち殺すなんて、

そんな乱暴な奴は早く取ツつかまえて遣る方がいいわ。逃がして仕舞うといけな
いから、直ぐに追っかけてお出でなさいよ。さあ、早くおいでなさいよ。

青年甲 じゃあ、行こう。

青年乙 むむ。行こう。

(甲乙は行こうとする時、奥のかたにてピストルの音きこゆ。人々は顔をみあわせる。)

青年甲 あ、ピストルだ。

青年乙 いよいよあいつに違いないぞ。

(甲乙は外へ出て、上のかたの奥へ走り去る。おつやは入口から見送る。つづいてピストルの音。おつやは慌てて戸をしめる。)

おつや あら、また撃った……。どこに隠していたか知らないが、あの人がパチンコなんぞを持っていようとは思わなかったが……。

重兵衛 むむ。おれも気が注つかなかった。いや、それよりも……。 (考える。) あんなおとなしい人が人殺しのお尋ね者とは、今まで些ちつとも気が注つかなかった。

おつや それだから、あたしがトテモ凄いと云ったのよ。(思い出したようにぞつとして。
。) ねえ、おじさん。あたし達の眼にはなんにも見えなかつたけれど……。あの人のうしろには殺された女の魂が、影のように付き纏まとっていたのかも知れないわ。

重兵衛 (又かんがえる。) そんな事もあるまいよ。

おつや それでなけりやあ死神だわ。あの人、いくら逃げまわっても、どうせ助からない人ですもの。行く先々へ死神が附いて廻まわっているのよ。

重兵衛 女の魂だの、死神だのと……。ここらでも今時そんな事をいう者はねえが……。
おつや いいえ、そうよ。屹きつとそうよ。あの人は何かに執とり着つかれていますに相違ないわ。

(太吉の手を把とる。) 太たアちゃん。お前、なにか見なかつたかい。あの人のうしろに……。何かぼんやりと……。影のような物でも見えやあしなかつたかい。

太吉 (頭かしらをふる。) 知らないよ。

おつや それでも怖かつたろう。

太吉 (うなづく。) ああ、怖かつたよ。あの人、屹とお化けだよ。

おつや そうだ、そうだ。おじさんは今でも平気でいるようだけれど、どう考えてもあの人は唯の人じゃあない。太アちゃんとあたしは本当に怖い思いをしたねえ。

重兵衛 (だんだんに釣込まれて。) 今夜にかぎって、太吉が無暗にあの人を怖がるのは、なんだか不思議だと思っていたが……。やっぱりあの人には……。何かの影が附いていたのかなあ。

おつや ああ、忌だ、忌だ。(そこらを見まわして。) あたしはまだ気味が悪いわ。

(暫しの沈黙。梟の声。やがて入口の戸をたたく音。おつやはぎよつとしたように、太吉の手をぐいと曳いて、上のかたに身を寄せる。)

重兵衛 (これも少し警戒して。) だれだ……。どなた……。

巡查 僕だ、吉村だ。

重兵衛 ああ、吉村さん……。 (直ぐに戸をあける。)

巡查 (内に入る。) 今ここへ負傷者を運んで来るから、兎もかくも土間へ入れて置いてくれないか。

重兵衛 怪我人ですか。

巡查 むむ。怪我人と云つても、実はもう死んでいるのだ。

おつや だれが死んだんですの。

巡查 人殺しの犯人だ。東京でカフエーの女給を殺して、方々を逃げまわっていた奴

を、そこで見つけて取押えようとすると、僕にむかつてピストルを一発……。

おつや まあ。

巡查 幸いに弾は外れたが……。当人ももう覚悟したらしい。今度は自分の額を撃つて

倒れた。

重兵衛 (顔をしかめて。) もう助かりませんか。

巡查 駄目だ。(頭をふる。) 急所だからね。なにしろ青年団の人達がここへ運び込んで来るから、些つとのあいだ頼むよ。

(云いすてて巡查は出てゆく。重兵衛とおつやは云い知れぬ恐怖に囚われたように、暫く無言。梟の声。)

おつや (小声で。) おじさん。あの人はやっぱり何かに執り着かれていたのよ。

重兵衛 そうかなあ。(嘆息して。) ああ、なんにしても忌な晩だ。

（二人は顔をみあわせる。薄く山風やまかぜの音。梟うしほの声。焚火はだんだんに薄暗くなる。）

—幕—

青空文庫情報

底本：「飛騨の怪談 新編 綺堂怪奇名作選」メディアファクトリー

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

初出：「舞台」

1936（昭和11）年7月号

入力：川山隆

校正：江村秀之

2013年7月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

影 (一幕)

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>